

## 「驚くべき人の回心」

一般的にはあまり報じられていませんが、今年マルチン・ルターがヴィッテンベルク教会の扉に95ヶ条からなる提題を掲示してから500年の記念の年です。マルチン・ルター？聞いたことはあるけど、誰だっけ？世界史の授業で必ず名前が出てくる人です。

16世紀の初頭、当時の教会では免罪符というものが売り出されており、人々はそれを買うことにより、自分の罪が赦されるということを教えられていました。とても残念なことです、それは教会にとっての墮落であり、暗黒の時代です。そんな時にルターはある手紙によって、その心に熱い思いを与えられていました。その手紙が闇の中にいる彼の心に光を当て、彼は揺るぎない確信と共に立ち上がったのです。そうです、免罪符により腐敗していたキリスト教会に対して「神の救いは免罪符によるのではなく私たちの信仰によるのだ」ということを彼は明らかにしました。ルターはこの確信と共に、1517年10月、宗教改革の運動に発展する「95か条の提題」をヴィッテンベルクの教会の扉に掲示したのです。このように「信仰による救い」という揺るぎない確信を彼に与えた手紙こそ、聖書中のパウロが書きました「ローマ人への手紙」なのです。

時はルターの時代から200年余りが経ちました1738年、5月24日、ロンドンに一人の牧師がいました。彼はその夜、心重く、気がすすまなかったのですが、予定されていた教会の集会に出席していました。時間は午後9時少し前、ある人が先のマルチン・ルターが書いた「ローマ人への手紙のための序文」を読んでいた。そして、ちょうどルターが信仰とは何であり、その信仰のみが人を義とすると書いてあるあたりにきた時に、その牧師、ジョン・ウエスレーの心に不思議な感覚がわいてきました。その時のことを彼はこう書いています。

「私は私の心が不思議にあたたまるのを覚えた。私は救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼したと感じた。そして、この私の罪をキリストが取り去って下さり、罪と死との律法から私を救って下さったという確信が与えられた」。この経験がウエスレーの転機となり、18世紀、閉塞感の中を漂っていたイギリスを光の中に立ち返らせたのです。ウエスレーは後のメソジストの始まりとなり、私達の教会もこのメソジストの流れの中にいます（皆さん、聖霊はあなたが心重く、気がすすまない集会に出ている時にもはたらかれます）。

今、お話しました二人は、その人生に多大なる影響を受けた手紙に出会うことによって、人の歴史に影響を与えました。そんな彼らが影響を受けた手紙は聖書の

中にあります「ローマ人への手紙」という手紙でした。私達は「人生の危機管理」という礼拝メッセージのシリーズを通して、聖書の中の人間たちの失敗をこれまで見てまいりましたが、これからしばらくこの「ローマ人への手紙」を見ていきたいと思えます。この16章からなる手紙という山に今日から私達は分け入っていきます。その道のりにおいて私達は驚くべき発見をしていくことでしょう。今日はまずローマ書の1章1節から3節から見ていきたいと思えます。

ここにはまずこのローマ書を書きましたパウロについて彼自らを説明している一文があります。この手紙は紀元59年頃にコリントという町から、ローマにいるキリストにある人々にパウロによって書かれた手紙です。当時、世界の都とも言われていたローマには、キリストの教えに生きる人達がいたようでありま。パウロはその人達に向けて、まずその差出人として自らのことについて書いています。

1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召されて使徒となったパウロから— 2 この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、3 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、4 聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである（ローマ1章1節—4節）。

キリスト教においてパウロは欠かせない人です。彼は12弟子の一人ではありませんが、まさしく彼は神の福音のために選び別れたとしかいいようのない生涯を送りました。以下、パウロがかつてサウロと呼ばれていた時代に使徒行伝が書き残している彼に対する記述です。

1 さてサウロ（パウロ）は、なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行って、2 ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった。3 ところが、道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。4 彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。5 そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると答があった、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6 さあ立って、町には行って行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」。7 サウロの同行者たちは物も言えずに立っていて、声だけは聞えたが、だれも見えなかった。8 サウロは地から起き上がって目を開いてみたが、何も見えなかった。そこ

で人々は、彼の手を引いてダマスコへ連れて行った。9 彼は三日間、目が見えず、また食べることも飲むこともしなかった（使徒行伝9章1節－9節）

今日、私達はアラブ諸国から目が離せません。このところにはダマスコにいるキリスト教信者を捕まえてエルサレムに連行してくるために脅迫と殺害の息をはずませながら向かっているパウロのことが書かれていますか、このダマスコとは今日のシリアのダマスカスのことで、彼は今日、世界が注目している町に向かう途中で回心をしたのです。そう、この男なしに今日のキリスト教はないというような働きをしたパウロはかつてキリスト教徒への脅迫と殺害に情熱を注いでいました。

フィリップ・ヤンシー(Philip Yancey)という人がパウロのかつての生き方がどんなものであったか、彼が今の世界にいたらどんな風に受け止められていたかということについてこんなことを書いています。

「私はアムネスティ・インターナショナル（世界中で起きている非人道的行為を非難する団体）から送られてくる郵便物の中に、打たれたり、家畜用の突き棒でつつかれたり、激しい突きをくらったり、唾をはきかけられたり、感電死させられたりした男女の写真が載っているのを見ると、同じ人間にそんなことができるなんて、どんな類の人なんだと思う。そして、使徒行伝を読むと、そういう残虐なことが出来る類の人間に出会う。それは聖書中に書かれている使徒パウロである」。

時はイエス・キリストが十字架に架かり、葬られ、多くの者達にその復活の姿を現した後のこと、パウロはそんなイエスの弟子達に対する執拗な脅迫、殺害の息をはずませながら、その道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためにダマスコに向かっていたのです。まさしく、その時にパウロがしていたことはヤンシーが書きましたように、今日、人権保護団体から非難されるようなものでした。

パウロとはそもそもどんな人だったのでしょうか。ピリピ3章5節を見ますと彼の人となりを知ることができます「私は八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である」（ピリピ3章5節－6節）。

この履歴を通して、彼は自分が純粋なユダヤ人であり、しかも聖書の律法を誰よりも学び、それを厳格に守っているパリサイ人であると言っています。パリサイ

人とは当時、聖書の律法を一字一句守ることを大切にしていた人でした。パリサイ人とは「分離された者」という意味で、彼らの関心は常に「どうしたら人は汚れに染まらずに、自分の身を清く保つことができるか」ということに置かれていました。

彼らはそれを必死に守っていました。その律法を守ることに、パウロは何の落ち度もない者であったと自分で言っています。そして、これはあながち嘘ではなかったと思います。それほどに彼は完全なパリサイ人として生きていたようです。そして、彼らと違い、それら律法を知らない、守らない一般大衆を「地の民」と呼び、見下し、さげずんでいました。

そのパリサイ人であったパウロはまた、使徒行伝22章3節においては「ガマリエルの門下生」であったと記されています。ガマリエルとは当時の律法学の最高権威者であります。その門下生の中でもパウロは際立っていたのではないかとされています。故にその彼の内には律法に対する高度な知識と燃えるような熱心さがあったと思います。そして、その熱心さはイエス・キリストを信じる群れと称するキリスト教会への迫害へと激しく向けられていきました。そう、彼はその内なる情熱の方向を間違えていたのです。

パウロはおそらくユダヤ人達やキリスト者達からイエスについて、その人格とその教えについて聞いていたに違いありません。しかし、それらの証言は彼にとりましては、キリストに対する敵意を駆り立てるものであり、イエスの弟子たちはペテン師に違いないという思いに拍車をかけたに違いありません。

近頃、イエスという名のユダヤ人教師が十字架にいおいて処刑された。そして、その弟子達がどうやら彼が復活したと言っているらしい。しかし、私が忠実に守っている律法によれば「木にかけられた者は神に呪われた者」（申命記21章23節）と言われている。十字架につけられて、よみがえってメシアなどと呼ばれている、そんな者を信じている集団は、狂信集団にすぎず、危険極まりなく、撲滅以外にない。ですから彼は強い信念をもって、殺害の息をはずませていたのです。

そんなパウロですが、ある時、今日もエルサレムを訪ねますとその旧市街にありませすステパノ門という門の側である経験をしました。それは、ステパノという人の死でありました。ステパノはキリスト者でありました。ある時、このステパノがその信仰ゆえに議会において尋問を受けたことが使徒行伝6章に記されています。それによるとステパノは「リベルテンの会堂に属する人々、クレネ人、アレキサンドリア人、キリキアやアジアからきた人々などが彼と議論したが、彼は知

恵を御霊に満たされていたので、それに対抗できなかった」（使徒行伝6章9節、10節）と書かれています。

ステパノはその時、御霊に満たされて壮大なメッセージを語りました。それはユダヤ民族の歴史というものに神がどのように関わってきたかということであり、その歴史においてユダヤの民がどれほど、その心を頑なにしているかということでした。民衆はこれを聞いて、心の底から激しく怒り、ステパノに向かい歯ぎしりをして、彼に詰め寄り、市外に引き出して、それぞれ代わる代わる石を彼に投げつけました。その石が彼の頭や体に命中し、その衝撃により気を失い、流血しているような時にステパノは祈り続けていました。そして、大声で叫んで言いました「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください」（使徒行伝7章60節）。

この時、私達が渾身の力を込める時に決まってそうするように、彼らは上着を脱いで思いきり石をステパノ目がけて投げていました。そして、聖書はその上着は「サウロ（パウロ）という若者の足元に置いた」（使徒行伝7章58節）と記しています。そう、パウロは人々が思い切りステパノに石を投げるができるようにと彼らの上着を預かったのです。

このことによりステパノは殉教します。すなわちパウロはステパノが死んでいく様を一部始終、間近に見ていたのです。熱心なキリスト者であったステパノの主張は明らかにパウロを苛立たせたでしょう。彼が石で打たれて殺されることを彼の願いでもあったことでしょう。しかし、彼にはどうしても理解できない、受け入れ難いことがありました。それは、聖書が記しているようにこのステパノの顔が「天使の顔のようであった」（輝いていた）（使徒6章15節）ということ、そして、彼が石で打たれて意識が薄れていく時に「この罪を彼らに負わせないでください」（使徒7章60節）と叫んだことでした。

ステパノの姿と言葉はパウロの心の中にはないものでした。自分はパリサイ人として知識と尊敬を得ている。律法を守るべくガムシャラに頑張っている。しかし今、打たれているステパノのような輝きと、自分を打つ者に対して許しを祈る心が自分にはあるだろうか。聞くところによればステパノの祈りはイエス・キリストが十字架の上で「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは自分で何をしているのか分からずにいるのです」という祈りに倣っているものらしい。彼はステパノの死後、事ある度にこの出来事を心に思い巡らしたに違いありません。

時折、わいて来るこの時の出来事が心に引っかかりながらも、彼は変わらずに殺害の息をはずませてキリスト教徒への迫害へと突き進んでいました。そして、そ

の道を急いでいる時、ダマスコの近くに来た時に、突然、天から光がさして彼をめぐり照らし、彼はその光により地に倒れたのです。するとその時、天から「パウロ、パウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声がありました。

彼は尋ねました「主よ、あなたは、どなたですか」とすると「私は、あなたが迫害しているイエスである」という声がありました。彼と共にいた同行者たちは物も言えずに立っていて、声だけは聞こえたようですが、誰も何も見えなかったと聖書は記しています。この時から彼は三日間、目が見えず、食を取ることもありませんでした。

この不思議な出来事がキリストの迫害者パウロの生涯の転機となりました。宗教的な言葉で言えば、回心となったのです。この時のことを後に思い起こしましたパウロは『1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召されて使徒となったパウロ』（ローマ1章1節）とあの日、あの時に自分は神の福音のためにキリストにあって選び別たれて召されて使徒となったのだと思い起こしたに違いありません。

彼はその後、アラビアの荒野で三年の年月を過ごしたと聖書は記しています。この年月の詳細に関して聖書は沈黙を保っていますが、彼はこの間、自分の人生をかけて熱心に学んだ聖書とイエス・キリストとの関係についてじっくりと黙想し、学び直したのではないかと言われています。そう、その時の確信を続くローマ1章2節は言っているではありませんか「2 この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、3 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、4 聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである」（ローマ1章1節－4節）。彼は荒野で日夜、徹底的に聖書を調べ、この福音は既に聖書の中にあらかじめ約束されていたものであって、これらは全て御子キリストに関することではないかと確信したのです。

この回心とこれらの荒野で日々を通して、それまでは「どこの馬の骨か」という見方しかしていなかった「イエスこそが神の子である」という確信をパウロは得ました。先にお話しましたように「木にかけられる者は呪われる」と書かれている言葉に従い、イエスの十字架はおよそ汚らしいこと、忌むべきこと、受け入れ難いことであったということがパウロのそれまでの確信でした。しかし彼はその「呪いの象徴」であった十字架が「自分の罪の身代わりであり、愛の象徴」であったということを知ったのです。

主にある皆さん、もしかしたら皆さんの中にキリスト教について今、一生懸命に学んでいる人がいるかもしれません。色々な書物を読んでこのキリストは本当に本物なのかどうかを学んでいるかもしれません。しかし、率直に言わせてもらいますと、皆さんはイエス・キリストという方に対してパウロがしたほどの検証をしていないと思います。彼は筋金入りの律法学者であり、ユダヤ人であり、ユダヤの歴史、ユダヤの律法を知り尽くしていたのです。その彼が自らのユダヤ人の歴史、すなわち天地創造からその時に至るまで、イスラエルにはたらきかけた神の足跡を全て検証し、そしていたった結論はイエス・キリストは神の子であり、この方こそがメシアだということだったのです。

キリストの十字架の意味を知った時に、彼は自分自身に対する理解にも光が当てられました。パリサイ派に属する者こそが義しい人だと思っていた彼が、ローマ3章10節で彼が言っているように「義人はいない、一人もない」という理解へと変わりました。自分こそが義しい人だと思っていたその彼が「自分こそが罪人の頭だ」（テモテへの第一の手紙1章15節）と言う者となりました。その自己認識が全く変わってしまったのです。そうです、人は神の光に近づき、それに照らされてはじめて本当の自分の姿を見ることができるようなのです。人間が作ったネオンの明かりのもとではこの自分の姿は見えないのです。そこで見えるのはせいぜい自分以外の人の欠点ばかりなのです。

パウロは気がついたのです。自分のいたらなさ、小ささ、心にある汚さ、そんな者が神に仕えているといいながら、実は神の座に座っていたということ。どんなに優秀な頭脳を兼ね備え、百戦錬磨で議論に打ち勝ったとしても、誰にもできない洗練された言葉で長い祈りをしたとしても、そんなことは無に等しいということ。それを彼は悟ったのです。

自分の本当の姿を知ったパウロはそんな思い上がった者のためにキリストは十字架に架かって下さったのだと自分の罪を知り、それと引き換えにその罪を赦すキリストの驚くべき愛を知りました。迫害の息を弾ませていた彼は180度、生きる方向転換をして、今度はキリストを伝える者となったのです。

私たちの中に今日、この教会に集っている者を縛り上げて、打ち叩こうと思ってこの場に来ている人はおそらくいないと思います。これから家路に着く時に、フリーウェイを運転中に突如、空からの眩しいばかりの光に照らされて、車を路肩に止めてしまう方も、おそらくいないと思います。そのような劇的な回心はおそらくないでしょう。

しかし、パウロの回心を思う時に、私たちはパウロの思い聞えてくるようです。パウロによれば、本当の意味における罪とは一つしかありません。それは、「神の前に己の義をたてること」です。神の前に自らを正しい者とする生き方、それこそがパウロの生涯でした。しかし、そんな自分は正しいと思っていたパウロがイエスの光に照らされた時、そして、その視力を失い共の者に手を引かれなくては歩けなくなった時に、彼はつくづく思ったことでしょう。「何と自分は無力で自惚れていたのだろうか」。自分が信念をもってやってきたことは、まさしく神に反することだったのだ。彼はそのことに気がつきました。それが、彼の回心でありました。

わたしは先にパウロがかつて誇りと思っていたことについてお話ししました。すなわち彼自身が書いているように『5 わたしは八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、6 熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である』（ピリピ3章5節－6節）ということでした。これが彼のかつての誇りだったのです。。

しかし、パウロがキリストに出会い、そのキリストを知った時に彼の心に変化が起きました。続けてこう書いています。『7 しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。8 わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損とと思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、9 律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである』（ピリピ3章7節－9節）。

それまでは、自らの知識と力を誇っていた。しかし、あのイエスの声を聞いた時から、自分の心に起きた回心。彼は、その時から本物を見出しました。そして、それはそれまで自分で築き上げてきたもの全てに置き換えても余りあるものとなったのです。

日本の四字熟語に「一期一会」という言葉があります。私たちの人生は人の出会いによって大きく変わることがあります。しかし、イエス・キリストとの出会いほどに大切な出会いはありません。教会への迫害の息を弾ませていたパウロを、絶大に価値あることのためにその生涯を捧げさせる者とされた神の愛は、今日も私たちの上に注がれているのです。この日が私たちにとってのダマスコ途上への道となることを心より祈り願っています。お祈りしましょう。